令和８年度第１回豊田市図書館協議会　議事録

日　時：令和８年７月１３日（月）午前１０時～１１時４５分
場　所：豊田市中央図書館６階多目的ホール
出席者：委　員　　９名（松永委員欠席）
　　事務局　　７名（教育部長　図書館管理課長ほか）
　　関係課　　６名（おやこ応援課、保育課、学校教育課
　　学校づくり推進課、こども・若者政策課
　　地域交流課）
　　オブザーバー１名（多様性社会共創課）
　　指定管理者　４名（館長ほか）
傍聴者：２名

議事

（１）令和７年度の取組実績等について

事務局　　：資料１にて令和７年度の取組実績等説明
來田委員　　：入館者数を見ると人口減少があるため、一定程度これはやむを得ない。一方で、貸出者数が減ったわりには貸出冊数が減った割合は少ないため、本を借りる人と借りない人の差がより激しくなっている可能性があると考えられる。
　　アクションプランがちょうど入れ替わりの時期なので、いろいろな視点をもって対応していただき、特に情報発信には非常に力を入れていると感じる。
藤田委員　　：２点お聞きしたい。
　　まず項目１の利用状況の（２）の蔵書冊数について、計画的に資料の購入実績を進めているということだが、もう少し具体的に、購入比率とか除籍比率とかを説明してもらうと、計画的に進められているということがわかる。
　　項目２の主な取組実績の（3）の重点取り組み３について、新規開設したインスタグラムは、私も時々見させていただいているが、フォロワー者数が 500 人ぐらいで少ない気がするので、もう少し工夫が必要だと感じる。
事務局　　：購入冊数、除籍冊数や比率については、図書館の事業概要 41 ページに購入冊数と除籍数が掲載されている。比率は掲載していない。

インスタグラムについては、確かに数がさらに伸びるとよいと考えている。これまで 10 年ほど続けてきたフェイスブックのフォロワー数が約 700 件。それと比べると、約半年で 500 件弱なので、ある程度評価できるが、まだまだ工夫が必要。

指定管理者　：発信については担当者がデザインなど工夫を凝らしている。
図書館のインスタグラムで私達がフォローしていないので、他の施設ともっと繋がることで、フォロワー数も増えると思う。
情報発信の頻度や方法に加えて、フォローも考えていきたい。

村林委員　　：項目 1 の（1）の表の一番右側の欄の新規登録者数のところで、豊田市では小学校一年生が登録者になるということだが、この 7,234 人のうちどれだけが小学 1 年生なのか。

事務局　　：統計の分類では 7 歳から 12 歳という分類になるが、7,234 人のうちの 2,137 人が 7 歳から 12 歳で、新規登録者のうち約 30%が小学生。

村林委員　　：洋書のところで言語分類がもう少し分かると、外国の母語の人もアクセスしやすい。これだけあるなら行ってみようという気になりやすいと思うので、どこかに資料として置いておけるとよい。

事務局　　：今後は新しく購入するものについては、ベンダーにも確認して検討していきたい。

來田委員　　：先ほど藤田委員からご提案があった項目１（2）の除籍の件だが、各基準に基づいて適切かつ計画的にと書いてあるが、適切かどうか、計画的かどうかはこのデータからは分からないので参照すべき事業概要のページを記載し、概要書と紐付けたらいいと思う。そうすると、適切性、計画的についてチェックできる。

（２）豊田市子ども読書活動アクションプラン（2022～2025）令和７年度取組実績

担当６課　　：資料２に基づき概要説明

藤田委員　　：項目 11 番下段の 2nd マタニティ教室にて、こども図書室職員による絵本の読み聞かせという記載だが、こども図書室ボランティアによる絵本読み聞かせの誤りだと思う。

事務局　　：誤りのため修正する。

横山委員　　：評価はもっと S があってもいいのではと思う。
A が非常に多いが、評価基準をお伺いしたい。

事務局　　：評価基準が手元にないため、またお送りする。
現在、この評価について、図書館管理課で見直し案を作成しており、今年度ワーキンググループで意見交換などして、来年度からは改正したいと考えている。

横山委員　：多分評価がよいことは、どんどんやられていくと思うが、例えば効果がない、人気がないという事業はやめる、もしくは統廃合した方がいい。
どんどん業務が増えてくることを避けないといけないと思う。
サービスが増えること自体はすごくいいことだが、効果的なサービスをどう上手に限られた資源の中で実施するかが重要。

來田委員　：多分、企業の方々はそういう評価の軸のたくさんの知見をお持ちだと思うので、ぜひいろいろアドバイスをいただきたい。
サービスをどんどん広げて業務が増えていくだけではいけないまさにご指摘の通りだが、効果がなくても残すべきサービスが行政の場合はあるという、この塩梅が非常に難しい。
その辺りのアドバイスもぜひ、企業の方にお伺いするといい。

村林委員　：豊田は広域で、いろんな地域性が違っているので、地域間で比べたりできるのか。
今後の課題としては、地域間の違いを見て、市全体で濃淡がないかを確認しながら、重点を置いていくことも必要だと思う。
例えば令和７年度取組実績を地域ごとの表にして濃淡を確認し、今年度以降の政策に活かしていくというような方向性があってもいい。

事務局　　：地域交流課にもご協力いただき、考えないといけない。

來田委員　：豊田市という大きな市の中の地域格差をどう考えていくかということは、おそらく他部署でも同じように考える必要があることかもしれないですけれども、部長いかがか。

熊谷部長　：豊田市は広域で地域ごとの特徴があるので、各部局がどこまでそれを意識しながら取り組んでいるかは不明だが、確かに重要な視点なのでどのように取り組むか考えていく。
地区ごとの貸し出し状況、不読率など、いろいろな視点で比べると新たな課題も生まれて、発見できると思う。

來田委員　：図書館のデータで何か把握できたらいいと思う。

事務局　　：各交流館（ネットワーク館）でどのような本が借りられているかというデータは、ベンダーに依頼すればわかると思うので確認する。

來田委員　：全てを同じように充実させることは難しいかもしれないが館ごとの特徴だけでもわかれば交流は促進できると思う。

事務局　：先日、地域交流課と連携して、交流館ごとの貸し出し状況を調べた。昨年度の貸し出しは、旧豊田市地域は、やはり蔵書が多い交流館が貸し出し数も多い。
しかし、山間部いわゆる合併後に豊田市になった地域は、蔵書数とその貸し出し数が比例せず、人口と比例していることがわかった。
サービスや支援の違いは、まだ調べられていないので、そういった点も参考にやっていく必要があると思っている。

來田委員　：スポーツ分野だと山間部になると圧倒的に多様な学習機会が減ってしまう。
全国的なレベルの NPO や NGO と一緒に講師がそこに行けるようにすることができるかが課題になっている。
読書活動もそういうことを考えていくと、子どもたちにとって豊かな文化的なバックグラウンドを地域で作ることができるかもしれない。
なかなか大きい課題だと思う。

（3）豊田市こども読書活動アクションプラン（２０２６～２０３０）

関係７課　：資料３にて概要説明

川合委員　：猿投地区の亀首に新しく県立の特別支援学校が今建設されている。
令和８年度８月ごろから通学が始まる予定だが、豊田市内に特別支援学校が新しくできるということなので、図書館としてどう関わっていけるかということを検討していただけたのか。

事務局　：今年度、夜間の豊田中学校や、豊田西高校附属の中学校ができたときにもすぐに団体貸し出しなどの支援を全部情報提供し活用していただいており、新しい特別支援学校にも支援をしていきたいと思っている。

來田委員　：事業の３番目にある保育課の好事例紹介について伺いたい。中根委員、何かよいご提案があったらご意見をいただきたい。

中根委員　：図書コーナー、絵本コーナーは各園の構造やレイアウトが限られていて、それぞれに違う。

広さや明るさなど、子どもたちがくつろいで読めるような環境が整っている園の紹介は他の園にも刺激になると思う。
絵本は保育の中で常に使うので、なかなか丁寧に扱えないが、以前修理のボランティアの方が、絵本の扱いのことを教えてくださり、綺麗に修理していただいた。
そういう事例を紹介しながら、絵本の修理のボランティアとも繋げていくこともできたので、そのような事例紹介をしていければよい取り組みだと思う。

來田委員　：私たちも好事例を見てみたい。
他になければ、学校図書室の課題把握や、図書館管理課による教員向け支援について、川原委員、新帯委員の意見を伺いたい。
学校図書館が、学校によって利用の仕方があまりに違う。
中学校も高校も暗くなって使われているのかなという感じのところと、生徒たちが常に出入りしている学校と、かなり温度差があるが、委員の学校ではどのようか。

新帯委員　：豊田南高校の図書館は、とても充実している。
司書の方が、この本こんなふうにいいというポップをつけて、本の面だしをしてくださっており、自慢できるほど素晴らしい図書館である。
しかし、生徒がそこに足を運ぶかというと、そこは勉強する場所として図書館の机には来るが、図書館の本を読むかというと読む子ももちろんいるが、貸し出しはあまり多くない。
最近 YouTube とか動画でも 1 倍速でなくタイパを重視する。
動画は、よく生徒たちは活用しているのだろうけれども、実際のその本を読むっていうところは、足が遠のいているのが今の子たちなのかなと感じている。

川原委員　：本校はまさしく山間部の学校で、全校で子ども 43 名しかいない。
子どもたちが地域の交流館まで行くのも車で 15 分ぐらいはかかるので、本当に子どもたちにとって、自分で好きなときに使える学校図書館の担う責任は大きいと感じている。
最近いろいろ総合的な学習で、まとめたことを他学年や保護者に発表したが、まとめ方として整っていないことが多い。先日も 4 年生が全校集会で調べたことを発表したが、パワーポイントに読み原稿が全部字になって映されていた。

子どもたちは知らないのだと思うが、指導する教員の方も、そこがきちんとわかっていない現状がある。
図書館管理課の方が子ども向けだけではなく職員に向けての授業支援をしていただけるのは、本当にありがたい。
7 名の学級担任のうち、5 人が 10 年未満の経験者で、若手を子どもたちの学習に寄り添える教員に育てていくことは学校の責任となっており、支援は大変ありがたいと感じている。

木本委員　：先ほど、こども・若者政策課の方が子ども会議で意見を聞くと報告されたが、当事者である子どもに意見を言ってもらってそれを聞いていくということは大事だと思う。
子どもたちの呼びかけ方法としては、学校にアプローチしていくと思うが、その中には特別支援学校とか、特別支援学級の人も来ていいというようなアプローチはされるのか確認したい。

こども・若者政策課
：子ども会議の委員の募集はもう既に終わっていて、今活動が始まっている段階。
特別支援学級の子や、特別支援学校に通学している子に関しては、特別に積極的な参加呼びかけをしていない。
しかし、子ども会議が多様な子には参加してほしいということは担当課でも課題であると思っている。
まず今取り組んでいることとしては、外国籍の子に来てもらいやすいように、やさしい日本語のチラシ作成や、通知文に関しても 2 種類作成をして取り組んでいる。
ご意見を参考に、いろいろな属性だったりとか、多様な子どもの声を聞けるように、今後も取り組んでいきたい。

來田委員　：子どもっていうことの中からこぼれてしまう子どもがもしかしたらいるかもしれない。その子どもたちには、こちらから積極的にアプローチする何かルートを会議の中の仕組みとして作っておくといい。

こども・若者政策課
：外国籍の方については、外国にルーツを持つ子どもたちと接してる団体の方を通じて声をかけていただき、昨年と今年は参加していただいている。
自発的に参加していただくのはなかなか難しいと感じている。

來田委員　：一番望ましいのは、その子ども会議に集まった子どもたちが自分たちでは声を聞くことができてない子どもがいることに気づ

き、その子どもたちがその人たちの声を聞きに行こうってなると、おそらく市民教育としてはベストなはず。
そういう形で特別支援の子どもたちに声を聞きに行こうという動きが子ども会議の中であるとよい。

木本委員　：ぜひそうなるといいと思う。
今言われたように、子どもたちの中で考える。
それがベストなので、それのいい例として、僕たちは学校の交流活動もしていて、風船バレーをいっしょにやっており、僕は１回目の場合は楽しくないっていう想定でやっていて、子どもたちがみんなで楽しめる方法を考える、そこで僕が使える道具を作ることを考える。
そこからが大事で、同じ特別支援学級の中にいる車椅子の子にどういうのがいいか聞きに行き、僕が使いやすい道具を想像して、その子と一緒に作ったということがあった。
こういうことが大事。外国の子どものことを意識してもらえるように、障がいの子どもたちのことも意識してもらえるよう、子どもたちの意思で入っていけるとよいなと思っている。

横山委員　：今避けられない課題の一つにやっぱり生成 AI との向き合い方がある。この一、二年、劇的に変わってきて進化している。
アクションプランの中で AI と何か絡めたもの、例えばイベントとか既にあるのかお聞きしたい。

事務局　：生成 AI のことはやはり図書館でも話題になっている。
既に実施したものでは、図書館のスタッフが、生成 AI を使って親子で活用の方法を試してみよう、という講座を実施した。
他に著作権の調べ方で、講座の中で少し最後に触れたりなどしているが、やはり進歩についていけないなどの課題はある。

横山委員　：AI では私も新規事業をやるのに、一気に 5 個ぐらい案を作れる。なぜならば、調べるスピードと角度が桁違いで、とんでもない量の情報が入ってくるから。
しかし、AI に聞いて返ってきたものがいいかどうかがわからないし、そもそも調べていることが間違っているかもしれない。
AI と読書っていうのはものすごくある意味相性がいいと思う。
そもそもの「読解力」と「使ってやろうという気概」がなければ、使われる側になってしまうので、非常に相性がいいと思う。
そこで AI の図書館での活用として提案が 3 点ある。

一つは。読書をして、読解力などが高まることで、より AI が活用できるという啓蒙活動。
例えば、図書館の方がおすすめする本と AI がおすすめする本がどう違うのかとか、いろんな切り口があると思う。
二つ目は読書バリアフリー。
洋書をどんどん増やしていくことも非常に大事だと思う。
一方、外国の方や障がいを持っている方が、最新の雑誌がリアルタイムで読めるのかというと難しい。
AI を使って、文字で読み込んだものがどんどん翻訳されることができれば、非常に画期的に進んでいくと感じる。
3 点目はバックオフィス。
先ほども質問したように、やることが増えれば、何か減らしていかなきゃいけないときに、何を減らすかを AI で管理していく。
例えば蔵書の除籍について、一定の条件をどんどん入れていけば、二、三年でかなり良くなるかもしれない。
というのは、図書館のいいところはデータが多いこと。
全てがデータ化されているので、AI や DX に向いている。
ぜひ今年から AI 活用に取り組みを始めることが必要だと思う。
そういった点でアップする分と、より良いことに時間が使えるようにすることの両方の面でうまくできたらいいと思う。

事務局　：公共だと、これもあれもやらなければいけないと、どんどん業務が増えていくが、何をやめるかという選別も難しいので、うまく活用できたらよいと思う。

來田委員　：なかなか AI は難しい。学生との対話でも悩んでいる。

中根委員　：先ほど、多様な子どものためのバリアフリーの推進ということがあったが、園の子どもたちもだいぶ外国籍にルーツを持つ方が増えて保育の中でも言葉の問題が増えている。
研修を通じて親子で本を読む機会の重要性について受講し、図書館の本の紹介ができたらいいと思う。
まず親子で母国語の絵本を広げて読んでもらって、その話の世界に親しんで、また日本語の絵本を見るといい。
図書館にもいろいろな言葉の絵本を置いていただけたらすごくありがたい。

來田委員　：だいぶそこには力を入れてきてくださっている状況だが、本当は一つの本が多国語化されているといい。
1 冊の本が多国語になっている絵本は何冊あるか。

事務局　：「ぐりとぐら」とか「はらぺこあおむし」とかがある。
何冊あるかはすぐ回答できない。

來田委員　：日本語でも読めるし、母国語でも読める本になると、日本語を学ぶ手がかりにもなる。

事務局　：学校図書館も、外国語の本を並べるコーナーを作っている学校が少しずつ増えてきている。
TIA で外国籍の方々の読み聞かせをやっているという情報を得て、今年度 TIA と何かコラボできないか考えている。
また、児童向けの洋書は言語に偏りがあるため、市内の外国籍（の市民の）在住の動向を見ながら購入を進めていくよう検討している。

事務局　：図書館では、様々な言語の絵本を持っている。
児童コーナーでも英語、ポルトガル語、フランス語、ドイツ語、ベトナム語、中国語、韓国語など、いろいろある。
ヨーロッパの特殊な言語のものもあり、団体貸し出しもできるので活用していただきたい。

來田委員　：そうした情報がさまざまなところに共有されるようにしていくといい。

村林委員　：子どもには、情報にアクセスできる方法が複数ある方がいい。
しかし、豊田市みたいな広いところだと（公共図書館に）アクセスしやすい人と、そうではない人があり、アクセスできない人は、スマホや　インターネットに頼っていってしまうことから、学校図書館の重要性が地域によって少し違う。
地域の違いを、こういう協議会で認識した上で、例えば予算配分に繋がっていくといいと思うので、地域の濃淡みたいなものは行政として把握した方がいいと思う。

來田委員　：地域格差は大きな課題。
身近にすぐに取り組めるご意見、長い将来を見て考える必要があるご意見などたくさん出していただいた。
事務局の皆さんには、ここで出された意見を踏まえ、業務が増えすぎないよう効率化を図りながら、ぜひ進めてほしい。
予定していた議題は全て終了したので、事務局にお返しする。

事務局　　：以上をもって、令和８年度第１回豊田市図書館協議会を終了する。